

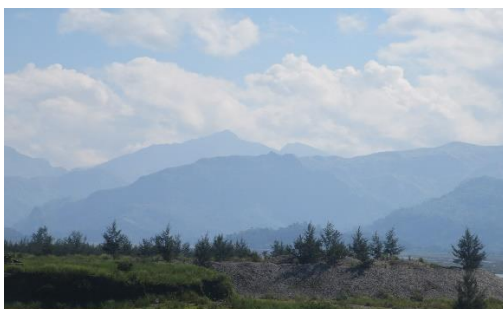
2016年7月 フィリピン・ブライダルボランティア

アエタ族のブライダルボランティア

アエタ族という民族は、人口5万くらいのフィリピン先住民族で今から約400年前までは低地に住み暮らしていましたがフィリピンをスペインが植民地支配した際に争いを避け山に移住して山に住み狩猟と移動式焼き畑農法により暮らしていた民族です。

ところが1991年のピナトゥボ火山の大噴火で山に住めなくなり町に降りてきました。ピナトゥボ大噴火とはどれくらい大きな規模だったかというと噴火の火山灰が60メートルつもり、その煙は地球1周し地球の温度が1年間0.5度下がったといわれるくらいの大噴火です。当然のことながら避難しなかったアエタ族の民も多く亡くなりました。噴火によって失った森林には獲物もいなくなり、街で何とか生計を立てなければならませんでした。ところが色黒、低身長、ちりちりの髪の毛…、言葉も違えば生活習慣も違う山の民…、彼らを待ち受けていたのは差別でした。最低限の賃金すらもらえない、最低層の貧民になり、ゴミ拾いや建築作業、物乞い…、生き残るための石にしがみつくような生活をしてきました。噴火から25年を経て、山の生活を知らない若い世代のアエタが育っています。言われなき差別に耐え、わずかな賃金を貯めて人並みの生活をしようと奮闘しています。

そんな若いアエタ族も華やかな結婚を夢見るようになりました。ところが一般的なウェディング関係の業者はアエタ族を敬遠します。十分な支払いが期待できないこと、何よりも汚いと思われるアエタにウェディングドレスを貸す業者はありません。…ならば、自分たちで貸衣装を開業しよう！アエタ族のためのウェディングをプロデュースしよう！そんなコンセプトで小さな貸衣装屋ができました。この貸衣装屋の前身はアエタ開発協会というNGOです。最盛期は数千のアエタが集い、自らの権利を主張し、時の政府と戦ったアエタ族による自助組織です。時の流れと共に活動の規模と資産は小さくなり、今現在はこの貸衣装屋のみがアエタ開発協会の独自プロジェクトとして機能しています。それなりのウェディングドレスを集めました。サイズ直しをするためのミシンと技術も手に入れました。…しかし、いまひとつ冴えないのです。イケてない…、そう言うしかありません。その理由は…、ドレスしかないからでした。ドレスに合うメイクとヘア…、これが今のフィリピンの技術では間に合いません。色黒、ちりちりすぎるヘア、一般的なフィリピン人とは違う容姿、小さな黒人と呼ばれる所以である身体的な特徴を綺麗に見せることができる技術がありませんでした。



今回からのフィリピン・ブライダルボランティアの目標は
「アエタ族のブライダルを現地の人達で出来るようにする」です。



1 日目の場所

ロータリークラブと宝塚在住の方の支援でボランティアが始まりましたが、これ以上は支援できないと打ち切れ頓挫していたプロジェクトです。やはり支援打ち切りにも訳があり奨学金で支援をしても男の子は仕事が見つかる途中で大学を辞めてしまったり女の子は結婚すれば大学を辞めてしまうという事がありせっかく支援していてもやりがない、という事があり中止になったのです。そこでこの施設でブティックをしよう。そうするとアヤタ族が服を借りに来る。じゃあブライダルをしよう。神父のライセンスを取れば結婚式もできる。という事で始まったプロジェクトです。

水道が通っていないので水は井戸水かペットボトルの水

今後この建物は改造してもいい

10人のモデル

差別された経験しかない。きれいになったことがない。

写真撮る時に自分に自信がないから下を向く。でも若い子達はきれいになりたいと思っています。親が反対するからすぐ結婚する。明日は一生メイクをしない女性もいる場所に行く。



このアエタ族ブライダルボランティアの将来ビジョン

「ブライダルといえばアエタ族」と言われるように10年後にしたい。



2、午後からの場所

ピナトゥボ大噴火の時に2000人のアエタ族を引き連れて町に避難してきた族長がいる村、族長は年老いたが今でもアエタ族の中では尊敬されている存在。

ここの民族は財産を持たない。だから家に戸も無い、その分悪気もなく人の物も共有する。すなわち盗んでいるつもりなく勝手に持って行ってしまう。



差別を受け続けてきたので自分に自信が無く雑誌を見てもそのとおりになれるとは思っていない。アエタ族はピナトゥボ大噴火が無ければ、教育を受ける権利も無く、公共のサービスを受けることも無かった民族、世界で忘れ去られていた存在。

3、ダニエラがいる海岸の町

この町は20年前には無かった。ルソン島より貧しい島から船に乗って渡ってきた人達が違法に住み始めてできた町です。男は漁師か麻薬の売人、女はほぼ100%売春で生活している。



最近、物は盗まなくなった。シンディ(倉本さん)に嫌われるから。尊敬する人間に嫌われるのは嫌だから。

この小学校は出席しなくても上がれる。フィリピン人がこの村に入って助けることはない。マザーテレサの施設もあるがそこに入れる子はラッキー、命が保証されているから、施設には殆どの子供が入れない。子供は親の為に働かされる。生理が来たら女の子は売春。子供同士、仲が良いのは両親が麻薬中毒でいつも家に食べ物が無いから栄養失調。小さな子供を子供同士で育てている。

物を配るから集まるのではなく楽しいから集まる、そういう関係にしたい。

ご飯を食べていない人に教会がケアしている。信者を増やす為。

高校に通えるのはバス代を出せる家だけ。国家試験が無いので美容師にはすぐなれる。腕が良ければ客が付く



レッド 18歳の少年(オカマ)

末っ子で赤ちゃんの時に、生みの親が子供の無い友達にあげてしまった。その後もらわれて行った先の親に子供ができてその子が可愛くなり、レッドのことが可愛く無くなり3歳から家政婦として使われてきた。彼は、セクシーショットをフェイスブックにアップしている。旦那を探すため。美容師には興味を持っている。彼に他の人生の目標を持たせたい。

ドクターティーマ(アエタ族を救った人物)

亡くなったがアエタ族の為に活動をした天才的な偉大なる指導者。アエタ族の医療費無料化を実現した人。

アエタ族には足し算引き算が出来ない人が多い。小学校2～3年レベル

フィリピンには150近い民族がいます。正確にいうと今のフィリピン人とはマレー人のことです。先住民族はアエタ族です。アエタ族とその他のフィリピン人を一緒に教えるのは無理。アエタ族は猿と呼ばれているから。



3日目 イバット村 山にあるアエタ族の村まで車で行ける所まで行き、その後は徒歩と牛車(水牛が引くリアカー)



今回来てよかったな、と思えたのは、村の娘のヘアメイクが仕上がった時にすごく綺麗な笑顔をした瞬間だった。その瞬間ボクの目には自然に涙が出た。明日から毎日山で狩猟と焼き畑農業の生活をするとしても、この一瞬、きれいな服を着てきれいな女性になる。山で暮らしていても、その瞬間やはり女性なのだと思う心に自信が出て顔が上がる。来てよかった。と思う。

ギャツビー1本分が一日分の日当の金額(1000円弱)なので取り合いになるから、先生、食事を作ってくれた人に



アエタ族の食事

100年前も200年前も同じ食事だったのだろう。

この村のアエタ族は1度町に降りたがまた山に戻って来た人達。

火山の噴火で火山灰が積り荒れた土地にここまで農作物を取れるようにするには大変な苦労があった。山の村には幸せになる為の条件がそろっている。友達、おいしい空気、食べ物、この村には体を売る女性はいない。

今回歓迎の為に我々に出してくれた食事は



バナナの皮で炊いたご飯

フィリピンさつま芋・里芋・トウモロコシ・マンゴー

オオトカゲ・竹で蒸したカエル…この二つは歓迎の感謝の喜びを表現した後謹んでアエタ族に返した。(アエタ族のスタッフがオオトカゲを町に持って帰りたいとごねる)

トカゲやカエルは彼らにとってご馳走だと村に行く前から聞いた。そんな物がなぜご馳走なのかと思っていたが現地に行ってようやく分かった。ご馳走というのは我々日本人の場合「味が美味しいもの」を指すがアエタ族では「貴重なたんぱく源」を指す。



支援の仕方

「お金を渡して大学に行かせる」という支援をしてきたグループはいっぱいある。

ところが現実には、サルと呼ばれてきた人達、学校では差別されえる。恋愛してすぐ結婚する。

「生活協同組合を作りなさい」と組織の作り方テキストを渡す。ところが山で生活をしてきた人達は、紙を読まない。テキストを読まない。

お金を渡すと、酒を買う、タバコを買う。

美容師にしてあげる。誰か一人アヤタ族美容師で生活できる人が現れると続くようになる

マリセル(富田さんの所にしばらくいたアヤタ族の女の子)

電気を知らなかった。富田さんの家に来た時は一晩中電気を眺めていた。

言って教えるのじゃダメ。日本人は尊敬されているから、その日本人がやるとみんながやる。

偉い先生方がゴミを拾うことを目で見せる。言うのではなくやって見せる。

箒を持ってはく。朝誰よりも早く来る。1日目にカットで出来た髪屑を自らが掃いて見せた。

そうすると二日目からアヤタ族のメンバーが掃き始めた。「ほらこの方がきれいでしょ」っ

て見せるとやる。フィリピンの先生は奥にいて出来上がったら出てきて指示をするだけ。

フィリピン人は物を自分で片づけない。「善き行いを見せる」きれいに並べる。何で掃除が

必要かを見せる。今回は割れた鏡でもやった。アエタ族は驚いていた。

見抜くチカラ

貧しい人達は人間を観る能力には長けている。誰が自分を攻撃して来るのか。誰が自分を擁護してくれるのか。

次からはオオトカゲやカエルのご馳走は用意されない。我々がイモ類やバナナ、トウモロコシなどアエタ族が普段食べている食事を食べるところを見ていたから。見て判断する。

アエタ族に仕事を与える人達

ノルジンの仕事、朝から晩まで溶接の仕事。韓国の造船業者。仕事を作ってやっているという。助ける感覚はない。韓国人の神父は来る。ボーンアゲインという団体。教える内容は日本人と仲良くしてはならない。神は一つだけだと教える。

本当に偉大な宗教家はそんなことは言わない。

ピナトゥボ山もある方向から見たらキリスト、裏から見たらブッダというように教える

農業の楽しさ

農業は神様に近づく作業だった。だからお祭りがある。

サントス＝彫刻家

イフガオ族のアートを追及している。どこにでも来るわけではない。

今回は自ら来た。直観力がある。

次も呼んでくれと言っていた。生き方にもアートがある。

富田一也さん

今回は、笑わない人達、さげすまれ続けてきた人達がヘアメイクをし、衣装を着せ1時間後

には笑った。自然と顔を上に向けた。もう衣装を脱ぎなさいと言ったらえーっまだ着ていたいと言ったのでじゃあ涼しいところで待っていないさいと言ったらアヤタ族他の皆より一段高い処に椅子を並べて座っていた。自信が出来た瞬間だった。

これまで教会の人、医師、大学生のボランティアが来てアヤタ族の娘を笑わせるのに2週間かかった。それを美容師の人達はちょいちょいと触って1時間後喜ばせることが出来る。まさにゴットハンド。きっとこれから山を越えて3時間かけてきれいになりたいというアヤタ族の人が出るでしょう。



少年が、ボクたちが帰るのをいつもでも見送ってくれた。

2016年7月16日

ウッディチキン 代表 伊藤豊